

第3回 CS-NET サロン開催報告

研究支援委員会 委員 子安 由美子(日本福祉大学/日本福祉大学大学院)



第3回CS-NETサロン企画は、猛暑真っ只中の2023年8月10日(木)13時~15時の2時間、「研究とプライベートライフのやりくりと苦悩」をテーマにオンラインで開催されました。院生の生活や悩み、社会人院生の経験談、常勤の職についてからの生活・経験談など、院生やポスドク、職を得て働いている方は、教育・研究・仕事とプライベートライフをどのように行っているのだろうかなどを自由に話していただくということで、第1部は立場の異なる初期キャリア研究者3名に話題提供をしていただきました。

まず始めに、日本福祉大学大学院修士課程の松本大樹さんより、ストレートマスターの日常生活と悩みなどが語られました。松本さんは研究を優先するため定職には就かず、奨学金と複数のアルバイトを掛け持ちしながら生活を支えています。スマホに電子本をダウンロードしたり、音声読み上げアプリを使用して、論文などのPDFを聴いたり、講義用動画等再生したりとICTを上手に活用することで移動時間も有効に使っていらっやいます。一方でお金と時間のバランスの難しさを感じているようで、時間があるが故に予定を入れてしまうが、金銭的な余裕がない、蓄えがない中での漠然とした不安は尽きず、今日のようなサロン活動を通して外の世界へ目を向けていきたいことなどをお話いただきました。ストレートマスターと聴くと、研究時間が沢山ありそうなイメージを持っていましたが、生活を支えながら研究を続けるという別の課題があり、安心して研究に打ち込む環境は簡単に得られないことをあらためて実感しました。

次に、北海道大学大学院博士課程の近藤純子さんより、院生としての研究と仕事・子育てについてお話をいただきました。近藤さんは修士までストレートで進み、現在は母子生活支援施設に勤務し、3人のお子さんを育てながら研究をされています。妊娠・出産を経て自身のキャリアにおける挫折を経験したことが研究テーマとの出会いだたと語られました。子育て経験は仕事や研究に繋がっており、自分の生活との葛藤の連続で、子どもの成長とともに時間の使い方は変化すると考えていたようですが、想像以上に子どものフォローに時間を費やしたと言います。そこで、時間と気持ちのゆとりを生む家の間取りや整理収納アドバイザーの活用、家電の活用など生活環境を整えていけます。ご主人の転勤が決まった時も研究を継続するために単身赴任してもらうことにし、TV電話などオンラインを活用してご家族との時間を大切にされています。家庭、実践と研究の両立には想定外のことが様々起きますが、実践者が学ぶからこそ生まれる気づきがあり、研究を続けられる環境を自ら整えていくことの大切さが伝えられました。

最後に、北海道大学教育学研究院 学術研究員の陳勝さんより、留学生として来日されてから現在までの研究生活や今感じていることについてお話をいただきました。外国人として日本で研究、生活を続けるうえでの心配や困りごととして、ビザに関することが大きく、就労条件等によって取得ビザの種類が変わり、取得できない可能性もあり、自立した生活ができるのか、将来への不安など悩みは尽きず、気持ちを開示できる相手もないことなど、切実な悩みが語られています。教員公募を見ても自

分の研究と募集内容が適切なかの判断が難しいとのことで、母国以外で研究者を目指すことで直面する不安や悩みが明らかになりました。

第2部ではブレイクアウトルームに分かれてフリーディスカッションをしていただきました。研究で行き詰まった時のリフレッシュ方法や時間の使い方など、活発な意見交換が行われました。時間の使い方は多くの参加者に共通する悩みのように、実践者だけでなく、常勤職にあっても研究時間の確保は難しく、遅くまで大学にいないことなく、決めた時間には帰宅する、朝時間を有効に活用するなどのマイルールが共有されて、時間の使い方に悩む一人として共感することも多くありました。また、研究者としてのキャリアを重ねていくうえでは周囲の協力や理解が欠かせないことなどの意見も出されました。

振り返りでは、気持ちを新たに元気や勇気をもらった、気持ちを話せて楽になったことなどの感想をいただき、このサロンの時間が参加者にとって有意義な時間であったことが確認できました。

今回は、一見すると研究に直結するテーマではないようで参加者は少なめでしたが、研究を支える根幹について語る貴重な時間でした。私は研究時間の確保を求めて実践現場から研究職に転職をしました。アカデミックな環境に身をおけることはこの上なく有り難いことです。しかしながら、思うような研究時間を確保することはできておりません。様々な要因はありますが、今回のサロン企画に参加して、同じように悩む仲間とざっくばらんに語り合えたことが今後の私の研究への起爆剤になったと感じています。これからもこの企画を通して様々なご縁が広がっていくことを願っています。